

草のみどり

Kusa no Midori



特集

公認会計士試験合格祝賀会

FRONT LINE

| 商学部 |

実社会で生きる多様な学び

| 国際情報学部 |

ITの世界にはまだ、ルールが足りない

FACULTY OF GLOBAL MANAGEMENT

世界を人に動かす Vol. 30

企業経営とグローバル経済の先端知識、優れたコミュニケーション能力を養うべく、国際経営学部生は前進を続けています。

私は思いついたことをアクションに移す人間です。この性格が形成されたのは高校時代にアメリカ人の友人に言われた言葉がきっかけでした。カナダの高校での学びは座学だけでなく、テーマに対するアクションを考え、発表する姿勢を求められました。中学までの私はおとなしい性格で、渡航して1カ月ぐらいいはカナダの授業スタイルに慣れることができませんでした。授業中に意見を言うことができませんでした。しかしある日、アメ



国際経営学部国際経営学科3年
Bronte College (カナダ) 出身

もり ゆい
森 優衣

インプットだけではもったいない その先への挑戦

リカ人のクラスメイトに「Just attending class and sitting there, listening is the same as not thinking at all. Unless you take action, no one will recognize your value. (授業に来て、座って聞いているだけでは、何も考えていないことと同じ。アクションを起こさないと、誰もあなたを評価しない)」と言われました。当時の私にとって、授業中に発言することへのハードルは高かったのですが、一度勇気をもって発言してみると、みんなで見えを交わすことの楽しさに気付きました。この経験から、私は自身の考えを表明することの重要性を学ぶと同時に、積極的に行動を起こすことを心掛けるようになりました。その後は、留学生生活を充実させるために、みずから積極的に異なる出身国の生徒に話しかけて多くの友人を作り、イベント実行委員会に所属するなど、考えをアクションに移すことを欠かさずに高校を卒業しました。

新しいことに挑戦したい。このような思いを持って私は、国際経営学部へ入学しました。そして、新しい本学部に貢献したいと考え、学部の実態についてブログ形式で発信する学生団体を設立しようと試みました。団体設立前に学生のアクションをサポートしてくださる国際経営学部の事務室の皆さんにご相談させていただき、10名程度のメンバーを集めることができました。しかし、私のビジョンがあいまい過ぎ、メンバーのモチベーションを保つことができなかつたため、私の考えを実現することはできませんでした。

そんな私に転機が訪れたのは、現在私が所属しているゼミの教授である中村潤教授との出会いです。私は大学1年次に受講する入門演習から教授にお世話になっていきます。教授の経験談やゲストスピーカーのお話から、新たな視点を学べる授業スタイルが好きで、当時の私は中村教授のグローバルマーケティング論も受講しておりました。この授業では座学と演習を組み合わせた形式で、マーケティングについて学びました。演習を通してビジネスについて考える



高校時代の友人たち

ことの面白さを知り、そこから私はビジネスコンテストに出場したり、アイデアピッチのイベントに参加したりするようになりました。

そのようなイベントに何度か参加した後に私が痛感したことは、ビジネスを考えるにあたり、どのような課題にアプローチするかを考えて課題解決案を提案するアウトプットの重要性です。一方で、国際経営学部ではインプットの機会は多いものの、知識を実践的に活用するようなアウトプットの機会が少なく感じました。そして、アウトプットの少なさは国際経営学部のみではなく他学部でも同じなのではないかと考え、学内で定期的にアウトプットの機会を提供するために、ビジネスコンテストの企画運営団体を設立すること



JMAC 杯、準優勝



第1回 Nexus ビジネスコンテスト

を決意いたしました。
私はビジネスコンテストに出場した際に、多くの刺激を受けました。審査員の方からアドバイスをいただいたり、出場者と交流したりすることで視野が広がり、新しい視点を得ることができました。企画するビジネスコンテストでは一人でも多くの学生が将来的にビジネスリーダーをめざすきっかけを提供することを目的としました。

えすることができました。ほかにもテーマ決めや集客などの困難に直面しましたが、頻繁にメンバーと意思疎通を図り、前向きな声掛けを行った結果、メンバーのモチベーションを維持し、一致団結してビジネスコンテストを開催することができました。コンテスト終了後には参加者の学生より新たな学びを得られたと感謝の声が届き、非常にやりがいを感じました。

この経験から得た重要な学びは、すべてを一人でやり切ろうとせずに、時にはほかの人の力を借りることの重要性です。ビジネスコンテスト実現までの道のりでは、たくさん困難に直面しました。はじめはすべて自分一人で解決しようと奮闘していたのですが、団体の執行部メンバーが相談相手になってくれたことで、より早く解決策を見つけることができました。この経験を通して、一人ですべてをやるよりもほかの人を巻きこんでア

クションを起こした方が、スピーディーにより良い結果をもたらせることを知ると同時に、自陣で抱え込むより、時には周りの人に助けを求めらうことが大切だと学びました。第1回目のコンテストを無事に開催することができたので、今後はより多くの学生に機会を提供できるように、魅力的な企画立案と宣伝活動に注力

したいと考えております。
最後に、私は出会いに恵まれていると思っています。新しいアクションを起こしたいと思った際に賛同してくれる友人や教授と出会えるのが国際経営学部です。この場をお借りして、私の考えを実現するために協力してください。感謝申し上げます。

国際経営学部だより

一つの都市から世界を見る

ふかまち ひでお
深町 英夫 国際経営学部教授

私の専門演習（ゼミ）は「アジア太平洋国際関係」をテーマとしており、ゼミ活動の一環である「フィールドスタディーズ（見学調査）」として、ほぼ隔年で「プロジェクト横浜」を実施してきました。その目的は、「多文化都市」「海運・貿易の拠点」「人の移動の玄関口」といった側面から、アジア太平洋ネットワークのハブとして横浜という都市が発展してきた歴史を学ぶことです。今年度も事前の予備学習を経て、2024年11月30日に横浜へ向かいました。

まず横浜都市発展記念館では、幕末の開港から外国文化の影響を受けつつ、横浜の都市社会が発展した経緯を学びました。同館併設の横浜ユーラシア文化館で、韓国・仁川とのパートナー都市提携15周年を記念する特別展示「思い出のチマ・チョゴリ」が催されていたことに、世界への窓という横浜の性格を学生たちは実感したようです。

その次はランチタイムを兼ねて、やはり幕末以来の歴史を持つ中華街へ移動し、中国の食文化に触れました。三国志の英雄・関羽を商売の神様として祀った関帝廟や、中国南部に由来する航海の女神を祀った媽祖廟も見学します。大陸・共産党系と台湾・国民党系に分かれた2つの中華学校は、

複雑な現代中国政治の影響を表すもので、ちょうどゼミで中台関係を学んだばかりの2年生は「なるほど」という顔をしていました。

続いて向かった外国人墓地には、開港から日本の近代化に貢献した多くの外国人が葬られています。たとえば最初の鉄道敷設に尽力した英国人技師モレルの墓には、今もJRの関係者が献花を行っているという案内の方の説明に、学生たちは神秘的な顔で聞き入っていました。

最後の目的地である横浜税関は、まさに貿易港・横浜を象徴する場所です。ブランド品の本物と偽物を見分けるクイズ形式の展示を学生たちは楽しんでいましたが、こんなところにも日本と世界とのつながりを感じたことでしょう。

こうして時には教室の外へ出て、世界や歴史に目を向ける授業を国際経営学部では行っています。



横浜ユーラシア文化館の特別展示パネル前にて